2015/11/08　障害学会第12回大会　発表資料

就学運動における責任と障害学の課題――東京都多摩市「たこの木クラブ」の活動から

立命館大学生存学研究センター客員研究員　藤原良太

1.　はじめに

本報告は就学運動における議論や実践を振り返るものです。本報告で取り上げる、東京都多摩市の任意団体「たこの木クラブ」は、現在は知的障害当事者の自立生活を支援していますが、もともとは「障害のあるなしに関わらない子どもたちどうしの関係づくり」をテーマとして発足した団体で（岩橋 2010）、就学運動に深く関わっていました。

さて、障害学において議論が重ねられてきた社会モデルは、「障害」の「責任」が社会の側にあるとしますが（立岩 2002: 69-71）、その責任の引き受け方は、介助の供給主体となることや、財の分配をすることが主とされてきました。

それに対し就学運動が主に目指してきたのは、「健常者」「障害者」という分け方を前提とするのではないような、「関係」の構築です。しかしその「関係」は、従来分けられてきた子どもたちが分けられることなくある場に居合わせれば生まれるというわけではなく、その場がどのような場であるのか、介助者がどのように関わるのか、といったことによっても規定されるものでした。

本報告では、就学運動の担い手たちが子どもたちの「関係」と場の関係に注意を向けるまなざしに注目し、たこの木クラブの活動の中でもとくに「子ども会」活動を振り返ることで、「健常者」と「障害者」の「関係」をいかにして構築するかを考える際に、「関係」が生じる場をいかにして設定するかが繰り返し問われていたことを提示したいと思います[[1]](#footnote-1)。

2.　たこの木クラブの試行錯誤

まず、たこの木クラブが成立から「関係づくり」のために試行錯誤してきた過程を簡単に振り返りたいと思います。

ビラ「たこの木クラブへのおさそい」では「子供会」は「障害のあるなしにかかわらず、誰もが参加できる場」とされています[[2]](#footnote-2)。

しかし1988年3月に行われた、一年に一度、これまでの活動の振り返りや今後の指針の検討が行われる全体会の第1回目では、「障害のある子」ばかり集まってしまったという反省がなされます（たこの木クラブ 1988b: 2）。

その後近くの公園を拠点とすることで（たこの木クラブ 1988c、たこの木クラブ 1988d）、近所の子どもたちが参加するようになります[[3]](#footnote-3)。

しかし今度は「障害児」がほとんどいなくなってしまいます（たこの木クラブ 1990a）。当初より、子ども会に参加した親の声では「スタッフの数が少なくて安心して子どもを預けられない」、「スタッフの方々の負担が大きいのではないかと気をつかう」といった意見がありました（たこの木クラブ 1988a: 5）。また送迎が不可能なため連れて行けないといった親の状況も明らかになっていきます（たこの木クラブ 1989b）。

また親の側の問題だけではなく、「受け入れの体制が不充分で結果、子供を選んでいる状況にいつも悩んでいます」と語られているように、場をつくろうとする担い手たちにとっても、人手不足は問題でした（たこの木クラブ 1989e: 14）。

これに対し子ども会活動に関わるスタッフ会議では、「ボランティア」により体制を充実させようと手当ての支給も検討されます（たこの木クラブ 1989f、たこの木クラブ 1990a）。

しかしただ単に人手があればよく、体制が充実すればよいというものではありませんでした。親も含め、大人たちの関わり方が問題とされます。

子ども会活動の中で、親たちがそれぞれの子をみながら親子と親子の交流をするのではなく、他の子の親や大人たちが子どもたちを一緒にみることで、子どもたち同士の関わりが生まれるように図られたのですが、実際には、親が我が子ばかりみていたため親子と親子の交流になってしまい、「『親はわが子を見るもの』という考えに、積極的に答えてこなかった」という反省がなされました（たこの木クラブ 1989a: 11）[[4]](#footnote-4)。

ここまで成立当初からの経緯、その中でも「子ども会」の活動を振り返りました。

子ども会という場をつくろうとする中で、子ども会という場に参加する者としない者、あるいはできない者とできる者というかたちで、「障害児」と「健常児」という分かれ方をしており、両者が出会えない構造が明らかになりました。

また両者が同じ空間に居合わせたとしても、親子と親子の交流になってしまったように、「子どもたち同士」として出会うことは困難でした。

このように、場をどのように設定するのかが、子どもたちの関係を規定することを担い手たちは知っていきます。「大人」がいかに関わるか、担い手たちと親とがどのように関わるかを含めた、場をどのように設定することができるかといった点は、当該社会における親が子に対して負う責任の配分のあり方や、「体制」を構築する制度や動員可能な資源の有無といった社会的条件によって規定されていました。

そしてこのように、場の設定と反省を繰り返すことで、子どもたちの「関係」と場のあり方の関係へのまなざしを担い手たちは培っていきました。

3.　「関係」へのまなざし

次に、担い手である岩橋が「子どもたち」同士の「関係」をどのようにまなざしたのかを見ていきたいと思います。

「子どもたち」同士の「関係」は、「大人」によっては成し遂げられないものとして捉えられますが、担い手たちは、活動の中で捉えられた「関係」の断片をヒントに、自身がどのように子どもたちに関わるかを試行錯誤しながら、自身の「関係」観を捉え直していきます。

岩橋は介助員として学校に行くことがありましたが、「子ども達は子ども達の世界だから」と「できるだけこう遠巻きに見てる」と言います。ある日子どもたちが川原でカレーを作るという課題に取り組んでいると、集団の中が苦手で、自分から一人ぼっちになっている子が川で遊んでいました。するとある子がやって来て一緒に遊び始めます。また別の子が「誰サボってんだよ」と呼びにきますが、呼びに来た子も一緒に遊び始める、といったことがありました。岩橋によればそのような子どもたち同士の関わりは珍しいことではなく、「結構あった」といいます。

岩橋はこの出来事について「そうやって皆がちょっと息抜きに、友達としているから一緒にいるからビシャビシャってやって、入れたりする」のだが、「その辺をどう教師達が、こう意識的に見てるかっていうとやっぱり見てないよね」と、教師たちのまなざしを問題化します[[5]](#footnote-5)。

岩橋の語りでは、「子どもたちの世界」における「関係」とは、「大人たち」が成し遂げられない、または妨げてしまうものとされていますが、「子どもたち」同士の関わりとしてその断片を捉えていたことが伺えます[[6]](#footnote-6)。

介助するかしないかを留保し見守るという岩橋による行為の選択は、子どもたちの「関係」に注意が向けられることでなされています。それに対し「教師たち」が「関係」をまなざす視点を欠いているとして岩橋は問題化していますが、岩橋が自身の「関係」観を捉え直す出来事も起こります。

ある日の子ども会は公園の散策でした。集合時、近所の子どもたちは「『Dも行くのか？』といやな顔」をしたといいます。公園で「落ち葉いっぱい、草ぼうぼうの道なき道」を登ろうとすると、D君が遅れました。岩橋は「待ちくたびれて、嫌気がさすのでは」と心配していましたが、E君が「よし、救助隊に行くぞ」と降りていき、D君の手を引き始めました（たこの木クラブ 1990e: 1）。岩橋はその日の出来事から次のように反省しています。

いつも「障害児」に悪態をつく子供たちが、「でも、一緒にいていいんだ」という感覚を持っていることに感激した。そして、いつも自分が言う「出会い」が大人である自分の枠の中で考えていたことに気づかされた。（ibid: 2）

岩橋はD君とE君の関係を、悪態をつく「健常児」と悪態をつかれる「障害児」という関係して捉え、「子どもたち同士」としては出会えていないと考えていましたが、実際には、「一緒にいていい」と承認する関係が生じていました。岩橋は「嫌気がさす」と予期していましたが、E君とD君の「関係」によって、E君は一度は置いていってもD君と再度関わりを持とうとしています。

またここではE君たちがD君を置いていってしまうという出来事が起こっていますが、「障害児」と「健常児」の「交流」として目的が設定された場ならば、そのような出来事は起こりません。子ども会という場が子どもたちにとって、お互いに居合わせてしまう場でありながら関わりを拒絶することも可能な場だったからこそ見えたことだったのだと思います。

　担い手たちにとって「子どもたち」の「関係」は把握しきれないものとして捉えられていました。しかし活動の中でその断片を見出していきます。そしてそれはしばしば、大人たちの想定や前提を超えるものであり、その都度担い手たちは自身の認識や関わり方を問い直していくことになりました。

4.　おわりに

以上のことから次のことが言えると思います。ある場に居合わせれば「関係」が可能となるわけではありません。その場において介助者を含め、周囲の人たちがどのように関わるのか、その場の内容や目標がどのように設定され、どれほど重視されるか、といったことが、どのような関係が可能となり不可能となるのかに関わります。

「子どもたちどうしの関係づくり」という課題に取り組むにあたって、担い手たちは子どもたちに対し、場を設定します。そこに子どもたちが居合わせたことで起こる出来事から、どういった関係が可能となり、不可能となったのかを反省的に考察し、場を再編していきます。そのような過程を何度も繰り返し、子どもたちと関わり続ける中で、自分たちの想定を超えた「関係」を見出していきました[[7]](#footnote-7)。

本報告で取り上げた、担い手たちが試行錯誤した過程の中に、「健常者」と「障害者」の「関係」をいかにして構築するかを考える際のヒントがあるのではないかと考えます。

[文献]

岩橋誠治、2010、「それぞれの自立生活への道と自立生活獲得のための支援」寺本晃久・岡部耕典・末永弘・岩橋誠治『良い支援？――知的障害／自閉の人たちの自立生活と支援』生活書院、74-144。

立岩真也、2002、「ないにこしたことはない，か・1」石川准・倉本智明編『障害学の主張』明石書店、47-87。

[資料]

（ビラ）

たこの木クラブ、1987、「たこの木クラブへのおさそい」。

（機関紙）

たこの木クラブ、1988a、『たこの木通信 5（2月）』。

――――、1988b、『たこの木通信 6（3月）』。

――――、1988c、『たこの木通信 9（6月）』。

――――、1988d、『たこの木通信 10（7月）』。

――――、1989a、『たこの木通信 18（3月）』。

――――、1989b、『たこの木通信 19（4月）』。

――――、1989c、『たこの木通信 20（5月）』。

――――、1989d、『たこの木通信 22（7月）』。

――――、1989e、『たこの木通信 24（9月）』。

――――、1989f、『たこの木通信 26（11月）』。

――――、1990a、『たこの木通信 28（1月）』。

――――、1990b、『たこの木通信 31（4月）』。

――――、1990c、『たこの木クラブ全体会資料　（1990．10．27）』。

――――、1990d、『たこの木通信 38（11月）』。

――――、1990e、『たこの木通信 39（12月）』。

――――、1991、『たこの木通信 41（2月）』。

1. ここで「子ども会」活動も就学運動に含めているのは、就学運動の担い手たちが、今まで「障害者」と出会うことなく育ってきたが故に「障害者」と関わるときに戸惑う自己と同じ社会過程を「子どもたち」が辿らないために講じてきた手立てを、本研究では就学運動と呼んでいるためです。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「たこの木子ども会は、出会いの場を作る為に、『普通』、『養護』、『特殊』という枠にとらわれずに、誰でもが参加できる子ども会にしていきたい」と述べられていますが（たこの木クラブ 1989b: 6）、そのように述べるのは、「『絶対に普通学級行こうと』とその前提を崩さず養護学校に通う親を排除したり、その親も親で養護に来たから、もう共になんて言えないと関係を断ってしまったり」することがあったためです（たこの木クラブ 1989d: 2）。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 1989年5月頃、子ども会の参加者は「いつも15名平均」で「『土曜日の午後，永山橋公園に行くと何かやっている。』と近所の子供達に認知されてきたのだろうとも思う」と述べられています（たこの木クラブ 1989c: 6）。また1989年5月のバーベキューには参加者100名が集まり、それに対し15名ほどのボランティアがいました（ibid: 1-2）。 [↑](#footnote-ref-3)
4. その場に親が関与しなければよいとはされませんでした。岩橋は次のように述べています。「『親がいなくても平気だよ。』という子でも、最後の寄りどころは親であり、親が居ないことで不安な事もあろう。又、親が参加する事で、まるっきり甘えん坊になってしまう子がいたり。子供にとっての親の存在の大きさを感じつつ、親がいて、子がいて、第三者がいて、そういうキャンプの中で、子供達の様子を見ていく事に気付かずにいた点を反省」（たこの木クラブ 1989e: 7）。

子どもたちにとって、親がいることで安心してその場にいられることがある一方で、親が参加することで子どもが親に対し「甘えん坊になって」、他の大人がその子に関わることが難しくなったり、他の子どもたちとの関わりが生まれにくくなります。親と担い手たちがどのように関わるのか、親と子の関係に「第三者」である担い手たちがいかに関わることができるのかかが模索されました。

具体的な活動としては、「『子供達を取りまく大人達の関係作り』にも目を向ける必要がある」とし、「たこの木交流会」が設けられていました（たこの木クラブ 1989a: 5）。主に親やたこの木クラブのスタッフが参加し、現在自らが置かれている状況や、学校や地域とどのように関わり、過ごしてきたか、といったことが定期的に話し合われました。

たとえば1990年の時点では、10月は就学時健診の時期でもあり、来年度の入学を控えて母親たちが多く集まりました。そのほとんどは、「障害児」の親であり、「『すでに校区の学校へ通う子の親の話を聞きたい』『自分の子が入学する学校の様子を聞きたい』」という思いから参加した人たちだったといいます（たこの木クラブ 1989d: 8）。

しかし同年10月に行われた全体会では、交流会について、「『障害』を持つ子の親の集まりではなく、もっと様々な人が集まり、子供たちが『共に生きれる』ような大人たちの関係をつくっていける会にしていきたいと考えています」とその指針が反省的に述べられています（たこの木クラブ 1990c: 5）。

また交流会は、就学前、小学校での事柄を中心とするパート1と、中学校から卒後までの事柄を中心とするパート2とに分かれます（たこの木クラブ 1991）。 [↑](#footnote-ref-4)
5. この点は、2013年8月21日に、岩橋誠治より口頭で教示を得ました。 [↑](#footnote-ref-5)
6. まただからこそ、共に過ごし続けること、「何度も何度も会う」といった（たこの木クラブ 1990b: 1-3）、「関係」が生成される条件の手掛かりもあったと考えます。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 担い手たちにとって、誰が、どこで、どのように「出会う」のかはあらかじめ知ることができません。

たとえば、D君にとってE君は、散策での出来事が起こるまで、｢悪態をついてくる｣子でしかなかったかもしれませんが、その出来事においてDくんは、自分に手をさしのべるEくん、自分の存在を承認する者としてのEくんに「出会った」のではないでしょうか。

こうした出会いは、置いていく／いかれるという出来事の次に起こっています。岩橋にとっては「悪態をつく／つかれる」という関係しか無いと思っていたところで生じた出来事です。

場の設定と反省を何度も繰り返すことで、様々な「出会い」のチャンスが生じていたのではないかと考えます。

またそれによって、子どもたち同士が関わり方を探り、「一緒にいていいんだ」という感覚を持つための時間も可能になったのではないでしょうか。 [↑](#footnote-ref-7)